キタを愛する人たちのための、キタを再発見するマガジン。ネットに載らない情報テンコ盛り。

弱いつながり号

つひまぶ

つながるひとまちぶんか

2018 10月号

北区魅力発信フリーペーパー「つひまぶ」vol.13　2018年10月1日発行　編集・発行：北区のおもろ通信団（編集長／浅香保ルイス龍太　編集スタッフ／田口和成・棚橋真理・平井裕三・松岡慧祐）協力：大阪市北区・北区コミュニティセンター・奈良県立大学地域創造学部　連絡先：【mail】tsuhimabu@gmail.com　【blog】http://tsuhimabu.blogspot.jp（誌面に載せきれない情報はブログでね♥）　定価：0円　主な配布場所：大阪市北区役所・北区民センター・大淀コミュニティセンター・北図書館・大阪市住まい情報センター・大阪市北区社会福祉協議会・江之子島文化芸術創造センター・大阪市ボランティア・市民活動センターほか多数（配布場所はブログにて随時お知らせします）
※当雑誌の内容、テキスト、画像、イラスト等の無断転載・無断使用を禁止します。

夜な夜なジャンルを変えて店長も変えて、緩〜いつながりで盛り上がる「週間マガリ」。この日は「読書好き Bar」。でも全員が読書好きというわけではない（笑）その緩さが「週間マガリ」。

「樽正とわたし」

居酒屋に見る、サードプレイスと弱いつながり

棚橋真理

堂山町にある、居酒屋「樽正」。

1966年（昭和41年）の創業というから、もう50年以上続いているお店です。

店の軒先でも売られているたこ焼き、どて焼き、おでんといった定番メニューはもちろん、カウンターの上には、大皿に季節の野菜を使った料理が並んでいます。

私がこのお店に通うようになって、早4年になります。最初は、連れていってもらったお店でした。5、6人でワイワイ言いながら食べて飲んで、料理の美味しさと居心地の良さにすっかりとりこになりました。

それからは、月に一度くらいのペースで「そろそろ樽正に行きたいな」と思うようになりました。一緒に行ったことのある友だちからも「また樽正に行きたいんだけど、いつ行ける?」とお誘いを受けることもあります。

ふたりで樽正に行きたくなるときというのは、たいてい、息苦しくなっているとき。息抜きがしたくなると、行きたくなるのです。お互いに、なにを抱えているのか知りません。聞きもしません。ただ食べて飲んでたわいのないことをしゃべって笑う、それだけのことですが、それが気持ちよくできるお店なのです。

その友だちと行くと、必ず会う人がいます。

「君らふたりはビールがええの?　ここは日本酒も美味いよ」と言いながらビールをごちそうしてくれるのは、もう何十年も毎日通っているという常連さんです。愚痴を言い合っていると「シャキッとね。人のことは放っといて、自分がシャキッとしとったらええ」とアドバイスしてくれます。酔いながらおっとりした口調でシャキッと!と言われるとついつい和んでしまって「そうだよね、自分がちゃんとしてたらいいよね」と愚痴も収まるのでした。

そのうちに顔見知りが増えていき、ついにはひとりでも通えるようになりました。

ある年の瀬、明日は大晦日というその日は、誰とも約束をしていなかったのに、どうしてもひとりで食事をする気になれない日でした。樽正に行けば誰かに会えるかもしれない。とても混んでいるだろうけれど、どこかひと席くらいあるかもしれないと期待を込めて飛び込みました。

案の定満席のなか、「こっちにおいでー!」と誘ってくれたのは、常連さんのご夫婦。「ひとりかいな、これ食べ。これも食べ」と次々料理をまわしてくれます。あと少ししたら帰ろうかなというときだったようですが、私が来たのでしばらく付き合ってくださったのでした。そのあと、「これ美味しいから」と注文もしてくれ、「よいお年を」と言って席を立っていかれました。

ひとりカウンターに移動したところで、注文してくれていたお料理が出てきました。

大きなどんぶりの、温かな一品でした。

カウンター隣に座った見知らぬおひとりさまとなぜか意気投合し、いただいた料理を分け合いながら盛り上がりました。温かな気づかいの一品がつなげてくれた出会いでした。帰り際、「また樽正で」と言って別れました。

連絡先も交換していないし、名前さえ聞きませんでした。

ここに来ると、連絡先はおろかフルネームさえ知らないけれど、何度も会ったことがある人がいます。元気な日も元気がない日も気になりません。その日の私をそのまま受け入れてくれるからです。餃子にニンニクの芽炒めを食べる私を見ながら「そんなに精つけてどうすんの?」と笑って箸休めさせてくれる人ばかりです。親しい人にはかえって言えないようなことも気兼ねなく話せてしまいます。「そうかそうか、まあ食べて」と言われるだけで、半分解決したような気になるのです。

そんな居酒屋を自分の行きつけにするなんてことは、酒呑みのおじさんの特権だと思っていたのに。私にもできました。

（終）

編集後記

今回の特集を組むにあたって浮上してきたのが「弱いつながり」というキーワード。そういえば、つひまぶ編集部も弱いつながりによって結ばれた人たちの集まりです。もともと仲が良かったメンバーばかりで雑誌をつくっているわけでも、仲良くなることを目的に雑誌をつくっているわけでもありません。それぞれ異なる本業やバックグラウンドを持つ人たちが、キタの人や文化にまつわる情報を発信したいという思いを共有して集まっています。編集会議の後に一緒にご飯を食べに行ったり、忘年会をしたりすることはありますが、プライベートで集まって遊ぶことは基本的にありません（笑）それでも、それぞれが資源や情報を持ち寄って雑誌をつくり上げ、それを通じて得たなにかを持ち帰ります。そのなかでも、取材先で魅力的な人に出会い、その人との弱いつながりを得られることは、つひまぶの醍醐味のひとつ。私たちは雑誌を編集することで、北区をあちこち旅する観光客になっているのかもしれませんね。（松岡慧祐）

「つひまぶ」ブログ
毎週月曜更新
http://tsuhimabu.blogspot.jp

「つひまぶ」では、編集メンバーを随時募集しています。興味がある方は、Facebook「つひまぶ」よりご連絡ください。

はちみつとフリーペーパーのお店「はっち」とワオンプロジェクトが主催する、フリーペーパー・オブ・ザ・イヤー。全国各地で合同巡回展示され、人気投票でその年もっとも支持されたフリーペーパーを決定します。今年はこっそりつひまぶも参加！

コミュニティから解放された都市生活者はどうつながるか？

奈良県立大学地域創造学部准教授
松岡慧祐

「無縁社会」という言葉が流行語にもなったように、昨今、人と人のつながりの希薄化が問題視されるようになっています。とりわけ北区のような都心部では、地域コミュニティが著しく衰退し、近隣の住民同士のつながりが失われているという見方が一般的。たしかに、単身世帯向けのマンションが林立する風景からは、こうした「コミュニティ衰退説」のリアリティーが強く感じられます。しかし、つひまぶが以前フォーカスしたことのある大淀や本庄などのように、北区にも濃密なつながりのある地域コミュニティが各所に残っていることは、一般的にはあまり知られていません。そのため、こうした「コミュニティ存続説」を伝えることは、つひまぶの使命のひとつでしょう。ただし、それは伝統的な農村社会のそれと同様に、閉じた地縁的なコミュニティにすぎないという側面もあります。それに対して、第三の仮説として説得力を持つのが、都市に生きる人々はもはや特定の地域コミュニティに縛られず、交通・通信手段の発達によって、広範囲に散らばっている人々と緩やかにつながるようになっていると考える「コミュニティ解放説」。そもそもコミュニティとは、ウチとソトの区別が明確で、それゆえ排他性やしがらみを内包する概念です。しかし、現代の都市における人間関係は、こうした旧来的なコミュニティ概念ではなく、人々が地域を越えてつながるネットワーク的なものとして理解する必要があるでしょう。それは必ずしも〝円〟のような集団的なまとまりを形成するわけではなく、個人と個人が〝縁〟でつながり、そうした関係性が網の目のようにひろがっている状態を指しています。そして、後者は前者に比べて、人のつながりが弱く見える場合もありますが、その代わり、はるかに自由で、開放的で、多様なつながりが生まれる可能性があります。そこで、今号のつひまぶでは、コミュニティから解放された都市生活者たちによる「つながり × 開く × シェア」の実践に着目し、北区でのさまざまな事例を通して、こうしたコミュニティ解放説のリアリティーと可能性に迫ります。

観光客と弱いつながり

まず、「コミュニティからネットワークへ」という流れを象徴する事例と言えるのが、1000人の日替わり店長でつくるバー「週間マガリ」。企画によって店長も客も流動的に入れ替わり、初めての客も温かく受け入れるマガリは、内輪で閉じる「コミュニティ」ではなく、多様な人々の新しいネットワークを結ぶ「ハブ」なのだそうです。本来、都市とは、多様性を許容し、互いに異質な人々が集まる場所ですが、同調圧力が強い日本社会では、ややもすれば都市のなかでもよそ者を排除する〝村〟のような空間が生まれます。そのため、いかにして異質な人々を包摂し、多様性を担保するかということが、大都市における重要な課題になっています。例えば、そうした異質な存在として北区でも近年目立つようになってきているのが外国人観光客。そんな外国人観光客にもまちを開き、地元の人たちとのつながりをつくっているのが「梅田まち案内エスコート」です。

しかし、私たちは今、単に観光客を受け入れるホストでいるばかりではなく、自分自身も観光客のようにさまざまな場所を訪れ、普段は決して出会わないような人に出会っていくというアティチュードが求められています。思想家の東浩紀は、著書『弱いつながり』（幻冬舎）のなかで、人間の生き方を、ひとつのコミュニティにとどまる村人タイプと、どんどん環境を切り替える旅人タイプに分けたうえで、両者の間を行き来する観光客タイプの生き方を推奨しています。現在はインターネットによって多様な人や情報に広くアクセスできるようになったかのように思えますが、実際のところインターネットは強いつながりをさらに強め、見たいものしか見ることができないツールです。そんなインターネットの限界を超えて自分の世界をひろげるためには、あえて軽薄で無責任な観光客のようにさまざまな場所へ移動することで、異質な人との「弱いつながり」を見つけるべきだと言うのです。社会学者のM・グラノヴェターは1970年代に「弱いつながりの強さ」という概念を提唱しました。それは、同僚や親類のように強いつながりがある相手よりも、パーティーでたまたま知り合っただけの弱いつながりしかない相手との関係のほうが、自分にとって予測不可能な情報をもたらしてくれるため、成功のチャンスをつかむうえで強い力を発揮する可能性が高いというもの。村人としてひとつのコミュニティにどっぷり浸っているよりも、観光客としてさまざまなコミュニティを渡り歩き、弱いつながりをあちこちに張り巡らせるほうが、偶然の出会いに満ちたかけがえのない生き方が可能になるというわけです。

場を開く試み

そして、人と人が偶然に出会い、弱くつながるためには、都市のなかに開かれた場が存在する必要があります。今回の取材で、北区にもさまざまなかたちで場を開く人たちと、そこに集まる人たちがいることが分かりました。カフェやイベントの運営を通してなんらかの自己表現をしたい人たちが、そのための資源を持ち寄ることでつながる「common cafe」。レトロなビルという資源を活用してなにかをやりたい人たちが集まる「タツタビル」。長屋に関心を持つ人たちのネットワークの結び目になりつつあるイベント「オープンナガヤ大阪」。あるテーマに関心を持つ人々がイベントごとに集まって自由に議論や交流をおこなうコミュニティ・スペース「中津ぱぶり家」。本好きの人と人をつなげる書店「本は人生のおやつです!!」。いずれも、なんらかの思いを共有する人たちが集まり、つながる場として機能しています。そして、それらは共通の目的や関心でしかつながっておらず、その場かぎりかもしれないという意味では、部分的で弱いつながりと言えるでしょう。最近はSNSに見られるように、コミュニケーションの接続自体を目的とする志向が若者を中心にひろがってきていますが、それは多くの場合、すでに親しい仲間との閉じたコミュニケーションにすぎません。もちろん、ここで挙げた諸事例においても、共通の目的や関心という縛りがある以上、ある部分では閉じているのですが、それでも、目的や関心以外は異なる属性を持ち、その場に行かなければ出会わなかったような人との新しい出会いが期待できるという点では開かれているのです。

さらに、特定の目的を持たず、関心を共有しなくとも、もっと多様な人々が気軽に訪れることができるような場を開く試みも、いろいろなところで見られるようになっています。神社の境内をなんでもありのイベント会場とする「豊崎じんじん」は、神社の境内が本来持っていたアジール（避難所）としての役割を、多様性のある都市のなかで復活させようとする試みだと言えます。また、駅のホームと電車の車両を酒場として開くことで、たまたま隣り合った人同士のつながりを生んでいるのが「京阪電車中之島駅ホーム酒場」。社会学者のA・ゴフマンによれば、駅や電車のように匿名性が高い都市の公共空間では、見知らぬ人に対して無関心を装い、互いに干渉しないことが、トラブルを回避するための一種の儀礼であると言います。しかし、ホーム酒場は、そんな儀礼的無関心が漂う都市空間を、知らない人同士の弱いつながりを生むコミュニケーション空間へと状況変換する技法だと言ってもいいでしょう。さらに、神社や駅と同様に、本来は開かれるべき場所を開く実践として、大学を身近な商店街に開き、科学者と市民をつなげる「北天満サイエンスカフェ」があります。

弱いつながりは、なにかをシェアすることで生まれる場合もあります。小さなオフィスのシェアによって事業者同士の交流が生まれる「SMALL OFFICE 翠明荘」。寄付／買うのネットワークを通じて間接的に人と人が支え合う「チャリティショップ めぐりもの」。いずれも、個人が共同体から解き放たれた個人化社会に、ひとりでなんでも所有するのではなく、共有できるものは共有しようという発想に基づく、新しいつながりのあり方です。

「ひとり」の自由

このように、北区にも芽吹く「つながり × 開く × シェア」の実践は、都市に新しいカルチャーを生み出し、経済合理性を超えた豊かさをもたらす可能性を感じさせます。しかし、そうした弱いつながりのあるサードプレイス（家でも職場でもない第三の居場所）は、なにも新しいものではなく、キタを代表する名店「樽正」のような居酒屋が昔から担ってきたものでした。新しい仕掛けなどなにもなく、ただ気が向いたときに呑みに行くだけで、隣り合った名前も知らない人との弱いつながりが生まれる。そういう場所は、意外と身近なところにもあるのかもしれません。

古典的な社会学者のE・デュルケームが19世紀に論じたように、近代化・都市化によって、人々はひとつの共同体のなかで同質的な集団に埋もれるのではなく、互いに仕事や役割を分業しながら、個性的で異質な諸個人として、有機的につながるようになりました。つまり、人のつながり方は共同体への帰属を前提とした単純なものではなくなり、自律性を持った個人個人が互いの距離を測りながら、誰と、なぜ、どうつながるのかを自己反省的に考えさせられるような社会に変わってきたのです。しかし、この日本社会では、3・11以降、絆の大切さがむやみやたらに謳われるようになり、ここ10年で大きく台頭したSNSは、常時接続・つながり過剰という状況をもたらしています。それは人々が、コミュニティから解放された状態＝「ひとり」を、〝孤独〟なものとして、〝不安〟や〝リスク〟として捉えるようになったことへの反作用だと言えるでしょう。そこで問われるのが、私たちはいかにして「ひとり」という〝自由〟を生かし、軽やかに移動する観光客になって、弱いつながりを選択し、蓄積していけるかということ。そして、そんな軽薄で無責任な観光客に対して、都市がいかに多くの選択肢を用意できるかということ。そんな選択肢がたくさんある北区は、ひとりでも孤独ではない、開かれた優しいまちです。

（終）

背景の写真は「豊崎じんじん」

中津6丁目には創業100年を超える立ち飲み屋「きつた酒店」があります。今は入口ののれんにしか「富貴」の文字はありませんが、昔は交差点に向かって大きな「富貴」の看板がありました。覚えている方はいらっしゃいますか？

開く

何でもありの豊崎じんじんは現代のアジール

豊崎じんじん
北区豊崎 6-6-4 豊崎神社境内
http://toyosakijinsuke.com/

「ツキヰチ杜の市 豊崎じんじん」は、豊崎神社の境内で毎月第3日曜に開催されている、杜の市です。オーガニックな食材、エスニックな食べもの、アクセサリーやハンドメイドな雑貨を売るお店などなど、何やらおもしろそうな露店が立ち並び、訪れる人々は木立の間で飲食をしたり、太鼓や弦楽器の音に合わせて踊る人がいれば、リラクゼーションでほっこりしている人も…。

前身は、境内でおこなわれていた朝採りマーケット。京都で採れた新鮮野菜がトラックで運ばれてきて、市の立つ日は、野菜を買い求める人でにぎわっていたのでした。この朝採りマーケットをきっかけに、地域で活動する人たちが集まる場として発展させることはできないだろうかと考えた有志の人々が集まり、2015年（平成27年）5月、地元優先という以外は出展内容を特に問わない、何でもありのイベント「豊崎ピクニック」が開催されました。

地元の飲食店や雑貨店などのテントが立ち並び、音楽や踊り、ワークショップもありの自由な空間が、豊崎神社の境内に出現しました。境内は朝から夕方までたくさんの人たちでにぎわい、特に、子どもたちやボランティアを中心におこなわれた「こども神輿づくり」は、神社の境内で開催するこのイベントの特色を生かしたワークショップとして、大きな注目を浴びました。

私を含む実行委員の面々は、神社の境内という場が、じつは多くの物事を包み込むことのできる懐の深い場なのだということに、あらためて気づかされたのでした。

「豊崎ピクニック」は、当初は一回かぎりの催しとして企画されたものでしたが、この成功を受け、毎月第3日曜に開催される「ツキヰチ杜の市 豊崎じんじん」として定着していきます。

「豊崎じんじん」の名前には、人と人（じんじん）や、心に直接じんじん来る楽しさ、という意味が込められています。「野菜」中心だった当初の市が、「人」が中心となる市に発展していけばいいなとの思いが込められているのだとか。

かつて、人々にとって神社は今よりも身近な存在だったのではないでしょうか。初詣や季節の変わり目、人生の節目などには氏神様に詣でるけれども、それは一年のうちでも数えるほどで、しょっちゅう行く場所ではない。そんな時代の移り変わりのなかで、氏地や地域に住む人々が集まる機会が少なくなり、結び付きも希薄になってしまっているのが現代なのかもしれません。

一方で、新しいかたちで結び付きを取り戻そうと考える人々が増えているのも確かなようです。「豊崎じんじん」に多くの人たちが集まる様子を見ていると、そんなことを強く感じます。

「豊崎じんじん」では、多くの人々がそれぞれに何かを持ち寄り、表現し、受け取り、交流し、何かを持って帰ります。人と人とが反応して、新しい何かが生まれる場所になっています。

神社の境内が本来持っていた場の役割のひとつは、アジール（避難所）だと言います。「豊崎じんじん」は、何でもありゆえに、誰にとっても心地よい場所で、ひいては、多様性を持ったクリエイティブなものが生まれる可能性を感じさせる場所として、現代の「アジール」なのかもしれません。（平井裕三）

~~つながり~~

つながればいいというものではないんです

common cafe
北区中崎西 1-1-6 吉村ビル B1F
http://talkin-about.com/

「日替わり店主」のカフェやバーは、今やさほど珍しくなくなっていますが、2004年（平成16年）に中崎町にオープンした「common cafe」は、その先駆けと言えます。そこを手がけたのは、『つながるカフェ』（学芸出版社）、『地域プロデュース、はじめの一歩』（河出書房新社）の著者でもある山納洋さん。そんなcommon cafeには、日替わり店主を中心に多様な人が集い、新たなつながりが日々生まれているはず…。そんなストーリーを思い描いていたところ、山納さんから意外な答えが返ってきました。「つながればいいというものではないんです。最近はただつながることを目的に集まる若い人も増えてきていますが、僕はその流れに同調はしません。そもそも日替わり店主という不安定なシステムは、つながりを生みにくいシステムです」。

common cafeでは、カフェの独立を目指す人をはじめ、主婦、OL、サラリーマンなど40～50人の店主が入れ替わり、週末には演劇、音楽ライブ、展覧会などの文化的なイベントが開催されています。「common cafeは、あくまで、こんなことがしたい！という思いを持った人たちを舞台に上げる〝実験劇場〟です。多様な人々を包摂して孤立を防ぐコミュニティカフェとは理念が違います。自己表現をしたい人たちが、カフェを運営するという課題に取り組みながら、それぞれのポテンシャルを生かす場があるということが重要だと考えています」。

そのうえで山納さんは、有機的なつながりをどうすれば生み出せるかを考えています。「この人がこんな資源を持っている、ここにこれが足りなくて困っている、という情報を可視化して、資源を持ち寄る。そうやって人が自然につながり、問題が解決する。そういうことに興味があります」。このように、つながり主義者であることを否定しながらも、「弱いつながり」に意味を見いだす山納さんは、common cafeでも、新しくやって来る人を排除しない開かれた場づくりを意識しているそうです。

私たちはなんのためにつながるのか？つながりや絆が称揚されるこの時代に、つながることを目的とするのではなく、自分がやりたいことを前提に人と人がつながるcommon cafeは、そんな問いを突き付けているように思えます。（松岡慧祐）

つながり

初めてのお客さんを大切にする「ハブ」

週間マガリ

【所在地】北区天神橋 1-11-13-2F
【営業】19:00 ～ 23:00（不定休）
【HP】https://magari.amebaownd.com/

ヘンな出会いがきっとある。そんなキャッチフレーズを持つ「週間マガリ」は、天神橋筋商店街の南端にあります。そこでは、会社員や大学の先生、近所のおっちゃんおばちゃん、女子大生など、いろいろな立場の人が日替わりで店長になって、週刊誌の連載のように思い思いの企画を打ち出し、お客さんとワイワイ楽しい会話が繰りひろげられているのです。

「いろいろな考え方を持つ人が出会って、化学反応が起きる場にしたいんです」。そう語る管理人の小西亮さんは、マガリが内輪ノリの生産性のない場にならないよう、細やかに気を配っています。初めて来るお客さんこそが化学反応の要素と考え、さりげなく話題を振ったりして、初めてのお客さんがいろいろな人と交流しやすい雰囲気をつくっているのです。そのさりげなさは、まるでやり手のスナックのママです（笑）毎回新鮮な企画が出るよう、店の仕切りは日替わり店長に任せます。でも、初めてのお客さんに対する配慮だけはこだわるのだとか。だからこそ、「マガリはコミュニティじゃなくて、ハブなんです」ときっぱりと語ります。

「くすぶっている人、やりたいことがあるけど実現できていない人こそマガリに来て、きっかけをつくってほしい」。新しい出会いが無意識に狭めていた視野をひろげ、考えもしなかったアイデアを生み出すのかもしれません。（田口和成）

御堂筋線中津駅から徒歩1分、通称・猫の小径に沿うように建つ木造の8軒長屋が改修され、「キタの北ナガヤ」としてオープン。長期滞在が可能な宿泊施設、ギャラリー、オフィス、シェアキッチン、アトリエ、レンタルスペースなどアリ。興味津々！

週間マガリの10月の主な企画（詳細はHPをご確認ください）4日「ネコシエーターバー」、6日「LGBTを語るバー」、9日「女子大生のお料理バー」、19日「メイド喫茶風バー」、26日「ITエンジニアの洋食バー」。気になる企画があれば、ぜひ！

11月10日、11日に開催される「オープンナガヤ大阪2018」には、豊崎を中心にキタにある長屋もたくさん参加しています。キタの北ナガヤ、SAORI豊崎、Re:Toyosaki、そして翠明荘もパンフレット片手に、キタの長屋を巡ってみるのもオススメです。

開く

ビルに住んでいると自然と住み開きになってしまいます

タツタビル
北区天満 3-4-5
http://tatsuta-bldg.tumblr.com/

超フォトジェニックなスムージーが大人気で、連日長蛇の列ができるカフェ「ジェイティードカフェ」さん、大正・昭和の着物の端切れや千代紙の図柄をプリントしたペーパーアイテムや雑貨で独特の世界観を展開する「夜長堂」さん、ビンテージをはるかに飛び越えたアンティークな古道具を扱う「古今」さん、リアル店舗ではないけれども、戦前の資料や古い大阪の経済新聞などをオンラインで販売する「古書鎌田」さんなどなど…、ちょっと変わったテナントがたくさん入っていて、ベトナムマルシェなど、イベントもちょくちょく開催するタツタビルさんは、単なるレトロビルの範疇には収まらない個性的なビルです。

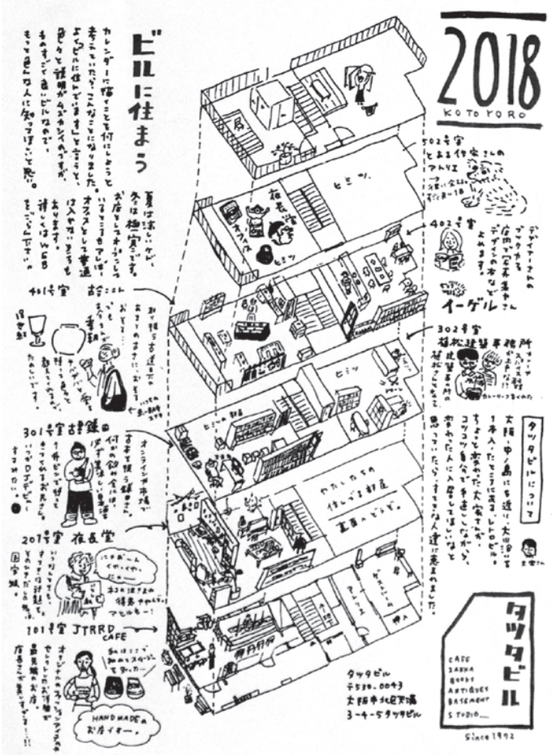
そもそも、タツタビルは、建築家の小松慎二さんとイラストレーターのひやまちさとさんご夫妻が、事務所を構えられているだけでなく、お住まいになられているビルでもあるのです。そんなビルにひと癖もふた癖もあるお店が集まり、人が集まり、何か新しいものやつながりが生まれていく…。単に入居しているのではなく、住居としてもテナントビルとしても、開かれまくっているのです。住み開き？ビル開き？　何開きですか？（笑）

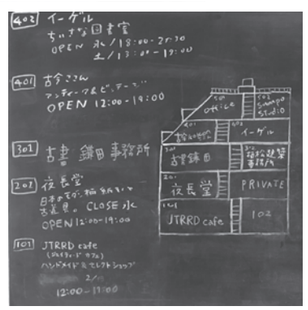
「ベトナムに1年住んでいたことがあって、ベトナムの良さを紹介するマルシェのようなものを開催できたらいいなと思っていて、この夏、ご縁があってようやく開催することができました。そんなふうにやっていたら、自然と住み開きになってしまうんです」。

「古いものを壊して新しいものを生み出すのが都市なのかもしれないけれども、古いものを活用して新しい色を出したいし、変わったビルになったらいいなあと思っています」と、タツタビルのアイデンティティーは、ご夫妻の思いが出発点になっていますが、それに加えて、入居されるテナントや集まってくる人のおもしろさも、このビルをカラフルなものにするのにひと役買ってます。テナント希望の方とは入居に際して面談をおこなうそうで、その際に、どういうことがやりたいのかをお聞きし、そのうえで自由にリノベーションしてもらうので、個性的でおもしろいものになるようです。聞いていると、賃貸契約というよりも、おもしろそうなことを企てる秘密の作戦会議のようです。

最近では、ひやまさんのふるさとである鳥取でも築85年の古民家を買い取り、ゆるゆると改装中なのだとか。住＋店＋宿のような拠点をつくり、天満のタツタビルとはまた違った拠点を鳥取にもつくろうとされています。暮らしの拠点を複数持つ多拠点生活には利点やおもしろいこともたくさんありそうで、また機会があれば紹介したいです。（ルイス）

ビル暮らしのこと、テナントさんの紹介など、ひやまちさとさんがイラストにして紹介されています。





京阪電車中之島駅ホーム酒場の会場となっている車両は5000系。片側5扉という、ラッシュ時の混雑緩和と乗降時間短縮を考慮した車両ですが、閉散時間帯には2つの扉を閉め切り、上部に格納していた座席を下ろして席数を増やす、驚きの機能が！

つながり

電車も酒場も基本は相席隣り合った人同士が仲良くなるのがいいところ

京阪電車中之島駅ホーム酒場
京阪電車のイベント情報は HP から
https://www.keihan.co.jp/

にぎやかな笑い声がこだまして、「ビールいかがですか？」と呼び込みの声も聞こえるここは、普段は入ることができない京阪電車中之島駅の3番線ホーム。そして普段あるはずのない車両から漂うのは肉が焼ける匂い。今年で4回目の開催となった「京阪電車中之島駅ホーム酒場」は、いつも通り過ぎるだけの駅のホームと車両でゆっくりお酒が飲めるという、ありえない酒場です。

「通勤電車でお酒が飲めたら、おもしろいですよね。イベントアンケートで必ず挙がるご要望にお応えしたのが、このホーム酒場です！」と教えてくださったのは、このイベントを企画運営している京阪ホールディングス（株）の藤田智子さん。

「このホーム酒場が、中之島に足を運んでもらうきっかけになればと思っています。酒場ですが、大人同伴であれば、お子さまも入場できます。いろんな方に来ていただいて、非日常を楽しんでいただきたいです」。その言葉通り、車いすやベビーカー優先の車両があり、ホームと車両との間隔が広い場所には規制線が張られ、安全で、誰もが安心して楽しめる環境がしっかり整えられています。酔っ払って線路に落ちたら、シャレになりませんから（笑）

「電車って、知らない人同士が隣り合って座るでしょう。ここでも普段走らせている車両をそのまま使っているので、やっぱり相席なんです。隣り合った人同士が仲良くなるのは、隣に座ったおばちゃんと仲良くなってあめをもらうような感じですね。ホーム酒場ならではの光景かも」。

いつもの車両といつものシートで、隣り合う人との距離の近さと親しみを感じながら、いつもと違う雰囲気に酔いしれて、ホーム酒場はますます盛り上がるのでした。（棚橋真理）

開く

長屋をキーにいろんな立場の人が交流することで新しいつながりを生みたい

第８回オープンナガヤ大阪 2018
http://opennagaya-osaka.tumblr.com/

毎年秋に、大阪の長屋を一斉に公開するイベントがあります。今年で８回目となる「オープンナガヤ大阪２０１８」。普段は、住宅や事務所、飲食店として利用されている長屋を一般公開してもらい、長屋での暮らしかたや活用方法、改修方法などの情報を発信するイベントです。

「オープンナガヤ大阪を通じて、たくさんの人に長屋に対する理解を深めてもらい、愛着を持ってもらいたいです。そして、長屋保全の機運が高まれば」と説明してくれるのは、このイベントの事務局を務める大阪市立大学大学院生活科学研究科の学生たち。事務局こそ大阪市立大学大学院に設置されていますが、実際に実行委員会の会議が開催されているのは、なんと豊崎です。

実行委員会には、府内のあちこちから、長屋オーナー、長屋に住んでいる人、長屋のリノベーションに携わっている建築家、不動産関係者、長屋のある風景が好きな人まで、長屋にかかわるあらゆる人が集まってきます。参加者に話を聞くと「今ある長屋をできるだけ長持ちさせたい」という思いを共有していました。

実行委員会は学生が主体となって進められますが、グループになって話し合う時間もしっかり設けられています。当初は全員で自己紹介をする時間もあったのだとか。「長屋を軸にしたネットワークづくりもしていきたい」とのことですが、開催８回目ともなると、毎年入れ替わる学生をよそに、参加者同士のほうが顔なじみになっていて、すでにネットワークができているようにも見えます。

長屋への理解と愛着を深める「第８回オープンナガヤ大阪２０１８」は、11月10日と11日に開催されます。（棚橋真理）

「梅田まち案内エスコート」は、この秋は10月6日に実施。阪急百貨店前西側に15時50分集合です。オープン参加なので、面倒な準備も事前申し込みもなし！知っているようで知らない梅田に出会えます！

開く

科学者が商店街で鍛えられます

北天満サイエンスカフェ

天五中崎通り商店街に「サイエンス」を身近に感じさせてくれる場所があります。その名は「北天満サイエンスカフェ」。大阪大学と中崎北天満商工倶楽部がタッグを組んで運営し、だいたい月イチのペースで開催されます。大学から科学者の先生を招いて、理科、経済、法律、文化、健康、子育てなど、さまざまな知識を提供してくれます。「理科だけでなく、生活に密着したものもサイエンスなんです」と大阪大学の長野先生。そう言われると、少し親近感が湧いてきますね。
カフェと言いながらも、科学者の先生が立って話される場所は、商店街の通路脇です。なので、通りすがりでも気軽に話を聞くことができるのです。おかげで、近所のおっちゃんおばちゃん、親子連れなど、なんとなく科学とは縁が薄そうな人の姿がたくさん見えます。ただ、気軽に話を聞ける半面、難しい話になるとすぐに帰ってしまいます。そこで、学生スタッフが登場。素人目線でどんどん質問してくれるので、自然と分かりやすい話になり、素人でも意見がしやすい雰囲気になります。
「サイエンスカフェは、聴衆だけでなく、科学者も鍛えられるんです」。講義ではない、アウェー感こそが科学者を鍛え、サイエンスが私たちにとっても身近なものになるわけですね。（田口和成）

【所在地】天五中崎通り商店街
【営業】だいたい月イチ開催。具体的な開催日時は HP から
【HP】http://kitatenma-cafe.com/

つながり

本はおやつ主食はやっぱり「人」です

本は人生のおやつです !!

堂島に、本好きにはたまらないお店があります。「本は人生のおやつです !!」。この変わった店名には、本は人生を豊かにしてくれるもの、でも主になるのは本ではなく人であってほしいという、店主の坂上友紀さんの思いが込められています。新刊書籍と古書の両方を扱っていて、新刊書籍は坂上さんが読んで確かめた本を中心に置いています。「売れ筋の本だけでなく、自分がいいと思った本も売る本屋になりたくてはじめました。初めての方でも常連さんでも、ここに来てくださるお客さまには、どなたにとっても居心地のいい場所にしたいと思っています。お話が合いそうな方同士は紹介することもあります。友だち同士を紹介するのと同じ感覚です（笑）」。本と人だけでなく、本好きの人と人とをつなげている坂上さん。「私自身、このお店をはじめてからの８年で読んだ本は、質量ともにかなりのものです。本について、お客さまに教えてもらうことも多いですし、出版社の方や作家さんと直接お話しすることも多いです。本のことも、本にまつわる人の思いも、ちゃんとお伝えしなければという気持ちで案内しています」。一冊一冊、熱く説明してくれるのは、そんな思いがあふれているから。お店では、今日も本をおやつに盛り上がる人の輪ができています。（棚橋真理）

【所在地】北区堂島 2-2-22 堂島永和ビルディング 206
【営業】火～金／ 12:00 ～ 20:00　土祝／ 11:00 ～ 18:00　日月定休
【HP】http://honoya.tumblr.com/

シェア

寄付／買う参加の敷居の低さが魅力

チャリティショップ めぐりもの

新品でも古着でも、かわいくて普通に欲しくなる服が 1,000 円前後。場合によっては 400 円なんて値札が付いていることに、そもそもビックリです。店内をのぞいてみると、服だけでなく、アクセサリーや雑貨、靴なんかも。これすべて、寄付で集められたものばかりです。常時、500 点くらいはあるんじゃないでしょうか。「チャリティショップめぐりもの」さんは、これらを販売して、運営に必要な経費を差し引いた全額を、子どもの人権を守る団体（NPO 法人子どもセンターぬっく）や、養育里親の団体（NPO 法人キーアセット）へ寄付されています。
代表の大野通子さんは、イギリス滞在時に、イギリスではボランティア団体が直営でチャリティーショップを運営しているケースが多く、リサイクルやリユースの考えがあたりまえのようにあることに感銘を受け、日本でも！と、ここ本庄東ではじめられたのだとか。はじめた当初には、売りものにならないようなものも集まってきたけれども、今では、いいものが多く、回転もよく、常に新しいものがあるので固定客も多いのだとか。寄付／買うことで身近にチャリティーに参加でき、寄付先の団体の活動を知るきっかけにもなる。チャリティーショップの魅力は、そんな参加の敷居の低さにあります。（ルイス）

【所在地】北区本庄東 2-2-8
【営業】12:00～17:00 不定休
【tel.】06-6359-6052
【HP】http://www.megurimono.com
【Facebook】
「チャリティショップ めぐりもの」

つながり

おもてなしからおせっかいへ

梅田まち案内エスコート

キタ歓楽街環境浄化推進協議会が主催する人気企画「梅田まち案内エスコート」は、毎年春と秋の大型連休の初日、多くの観光客が大阪を訪れるときに実施されています。地図看板やスマホのマップアプリを見ている人などに声をかけて、目的地まで案内する活動です。この活動に何度も参加されている、介護旅行における認定トラベルヘルパーの資格を持つ石井ひとみさんにお話をうかがいました。「家業を引退して、おもしろく取り組めるものを探していたところ、この活動に出会ったんです。英語を勉強していたので、英語を使う機会があって、車いすやベビーカー、高齢者など交通弱者の方へのルートの案内もできて、介護旅行の経験も生かせるこの活動がぴったりだったんです」。ぴったりなのは、石井さんの大阪人気質にも当てはまっています。「時は金なりじゃないですけど、旅行に来られた方が迷って、時間を無駄に使っているのが気の毒で。放っとけないというか、大阪人のおせっかいな性格ですよね（笑）もちろん、喜んでいただけるのはとってもうれしいです。感謝もされるし」。
観光客と地元の人たちがつながり、おせっかいと感謝という、ラブが循環する活動は、おざなりの観光以上のものを生み出しているかもしれません。（ルイス）

【主催】キタ歓楽街環境浄化推進協議会
【日時】おおむね、春の GW、秋の SW 初日土曜に開催
【HP】
http://kitakanrakugai.web.fc2.com/

シェア

シェアオフィスのようなスモールオフィス

SMALL OFFICE 翠明荘

豊崎東公園に面したところ、でもなぜか立体駐車場のなかにエントランスの階段がある、年季の入った建物があります。外壁には「SMALL OFFICE 翠明荘」の文字。ここは、グラハム裕美子さんが管理人を勤め、築 70 年以上の古いアパートをリノベーションしてスモールオフィスとしてよみがえらせた、新しいコミュニティ空間です。9.93 ㎡～13.13 ㎡の各部屋には、トラス構造の屋根組の古木や古アパートの名残であるタイルの炊事場が残る一方で、トイレは共用。さらには冷蔵庫、掃除機、電子レンジなども共用とし、できるだけ部屋を広く使ってもらうために、共用できそうなものはすべて共用にしています。そのせいで、各部屋同士が仲良くなるきっかけが生まれるのだそう。モノの貸し借りがあったり、税理士を紹介し合ったりするなど、さまざまに交流があるのだそうです。果ては、忘年会や BBQ 大会を催したりするのだから、現代の「向こう三軒両隣」のようで、実際に、各部屋はスモールオフィスとして独立しながらも、むしろシェアオフィスといった趣です。管理人のグラハム裕美子さんの気配りもあって、単なるスモールオフィスの概念を超えた、新しいコミュニティのかたちがここでは生まれているようです。
（ルイス）

【所在地】北区豊崎 4-8-21
【HP】http://www.suimeiso.com/

つながり

最終的には社会の問題に関与してほしい

中津ぱぶり家

「中津ぱぶり家」はパブリック・エンゲージメント（公衆・公共への関与）の促進をコンセプトに、いろいろな価値観を持った人が集まり、自由に話し合うコミュニティ・スペースです。当初は、喫茶店など場所を転々としながら開催していましたが、地域の人と外からやって来る人が交じり合う場所をつくりたいとの思いから、2015 年（平成 27 年）３月に中津商店街に拠点が生まれました。これまでに、延べ 6000 人以上の人が、ここで開催されたイベントに参加されたのだとか。開催されるイベントは「哲学カフェ」「いまの世を生き抜くための勉強会」「ボードゲーム」「映画の制作」など多岐にわたっています。
議論するとなると、自分の意見が否定されたりしてヒートアップしそうなものですが、それよりもむしろ、個人の意見が尊重されて、さまざまな価値観を持った人々の話を聞くことができると、リピーターになる人が多いそうです。ファシリテーターの仕切りが上手なんでしょうね。普段は大学で講師をされている主宰の森本誠一さんは、「３年経過して地域との交流が弱いことが課題、地域の方にも気軽に利用してもらえる仕組みを考えていきたい」と、今後の方針を語ってくださいました。
（平井裕三）

【住所】北区中津 3-18-22
【営業】不定期開催（イベントのある日）
【HP】
https://sites.google.com/site/nakatsu3chome/

北天満サイエンスカフェの10月のスケジュール（詳細はHPをご確認ください）「こども面白サイエンスカフェ」（日時）27日14時～16時、（演示・指導）理科の先生のみなさん。お近くにお越しの際、お気軽に立ち寄ってみてください。

今号の特集のきっかけになったのは、「弱いつながり」（東浩紀）、「ゲンロン0 観光客の哲学」（東浩紀）、「つながるカフェ」（山納洋）、「#カリグラシ」（OURS）などの新しい価値を模索している本たちでした。

つながり

YOUはキタのどこが好き？

梅田で見かけた観光客のみなさんにキタの気に入った場所や印象を聞いてみました

①フランス ③家族でバカンス ④空中庭園はファンタスティック！ ⑤海遊館にポケモンセンター、ヨドバシカメラに巨大百貨店など、いろいろなスポットがあって、梅田は家族で楽しめる場所も多いのが素敵ね。

①フランス ③家族でバカンス ⑤ポケモンセンターが私を待ってるの！

①ドイツ ②40 歳 ③観光で来ました。④お初天神（露天神社）に行ってきました。人形浄瑠璃のモデルにもなった事件の舞台になった場所です。⑤日本の仏教文化に興味があります。お初天神は仏教ではありませんが、日本のオリジナルな文化。神社と寺の区別は私たちには難しいですね。

①ベルギー ②28 歳 ③堺に住んでいて、日本語の勉強のためにやって来たよ。今日は友だちと梅田で遊ぶ予定なんだ。④堺に住んでいるんで、キタのことはあんまり知らないんだ。遊ぶのも難波が多いからね。⑤ある日、ラーメンが食べたくなって、ラーメン屋さんに入った。でもその店は、僕だけがラーメン屋さんだと思い込んでいたようで、じつは居酒屋だったんだ。当然、ラーメンは置いていない。僕はショックで軽く落ち込んでいたんだけどね、そのときだよ、お店の人がラーメン屋に電話して、ラーメンの出前を注文してくれて、お店で出してくれたんだ。居酒屋なのに！
　日本では、そんなファンタスティックな経験をしてる。人情にあふれた国だと思ってるよ。

①オランダ ②22 歳 ③観光 ⑤飲み放題や食べ放題のお店がたくさんあって、びっくりしています。オランダには存在しないシステムですね。アルコールの飲み放題だけじゃなくて、焼肉やお寿司食べ放題、スウィーツ食べ放題などのお店もあるみたいですね。オランダでそんなお店を出したら、きっと、つぶれちゃうと思うわ。大食漢の人が毎日来たらどうするの？

①イギリス ②29 歳 ③日本のファッションに興味があって、着物を研究したくて日本に旅行に来ました。④中崎町 ⑤日本のクラシックな雰囲気が味わえる中崎町が好きです。念願の浴衣を着ていろんなお店に行っています。浴衣を着ていると、飲みものが割引になったりして、得することが多いです。写真を撮らせて！って何度か言われました。

①イギリス ②28 歳 ③観光 ④中崎町 ⑤旅行で日本に来ています。この機会に、多くの日本文化に触れたいと思っています。財布を落としても盗まれずに戻ってくると聞きました。信じられないけど、治安のいい日本なら、ありえるのかも。治安の良さも感じたいです。

①トルコ ②44 歳 ③女子旅 ④大阪城 ⑤道に迷っていると、すぐに誰かが近寄ってきて、道がわかりますか？と尋ねてくれるの。昨日はバスに乗ったけど、案内してくれた男性が、バスの運転手に「この人たちは外国人だからよろしくたのむよ」って言ってくれてた。とても優しい国だと思ったわ。今日は猫カフェに行くの。ドッグカフェにも行ってみたい。動物園以外にそういう場所があるのって、日本ならではよね。

①どこの国の人ですか？ ②何歳ですか？ ③大阪に来た目的は？
④YOU はキタのなにが好き？ ⑤キタで体験したエピソード

①台湾 ②28 歳 ③留学 ④中崎町が好き ⑤台湾でも日本語は学べるけど、日本語以外にももっともっと日本文化に触れたくて、大阪に留学に来ました。私は、日本語のなかでもカタカナがとってもクールで好き。台湾にいるときはそうでもなかったのに、大阪に来てからはポケモンに夢中になってます。ポケモンの世界にはカタカナがあふれているし、ポケモンもキュートだから。大丸にあるポケモンセンターは、私の一番のお気に入りの場所ね。聖地よ。

①中国 ②52 歳 ③ビジネス ④梅田はファッション情報発信基地 ⑤10 年くらい前から毎年のように日本に来てる。大阪には仕事で来るけど、観光では広島や富士山、横浜に行った。梅田はこの10年でどんどんエキサイティングになっていると思う。中国からの観光客が増えているせいもあって、中国語の表示が増えたし、免税のレジも増えた。最近では、電子マネーも使えるようになってきているわね。でも、wifi 環境はまだ遅れていると思う。トラブルのとき、10 年前だと中国語が話せるスタッフはとても少なかったけれども、最近は中国語が話せるスタッフを常駐させているところがほとんど。中国人にとっては、梅田は旅行しやすいまちになっているわね。

①マレーシア ②29 歳 ③観光 ④ヨドバシカメラ ⑤3日前に大阪に来たんだ。大阪駅に着いたのが深夜で、しかもホテルが見つからなくて迷っていたときに、日本人の男性が声をかけてくれて、30 分かけてホテルまで送り届けてくれたんだ。スーツケースまで運んでくれて、非常に感動したよ。しかも、ホテルは彼の家とは反対方向だったんだ。言葉はなかなか通じなかったけど、すごく感激したね。

①カナダ ②21 歳 ③大学の友だちと旅行 ④たこ焼きに挑戦したい。⑤日本にはいろんなタイプのマヨネーズがあるんだってね。マヨネーズが人気食品だと聞いて、僕もマヨネーズ好きだから楽しみにしてるよ。大阪は食の都だから、いろんなマヨネーズも試してみたいし、いろんな食べものに挑戦してみたいね。タコもじつはまだ食べたことがないんだ。あと、銭湯にも行ってみたい。行ってみたいところがたくさんあるんだ。

①カナダ ②21 歳 ③観光 ④空中庭園に行ってみたい。⑤私のおばあちゃんは日本人。おばあちゃんに会いたくて、休みを利用して日本に来たのよ。AED に鍵がかけられていないって聞いたわ。カナダだと数秒で売り飛ばされるんじゃないかな。AED が綿密に配置されて、緊急事態の場合に使用できる準備があるということは、日本社会の民度の高さを示していると思います。カナダも見習わなければ。

①アメリカ ②44 歳 ③観光 ④大阪はコンパクトにまとまっていて移動しやすいまち ⑤どうしてこんなに暑いの？殺人的。この暑さはユタ州の砂漠並み！

①アメリカ ②44 歳 ③家族で観光に ④まだ来たばっかりなのでわからないけど、大阪城には行ってみたいね ⑤大阪はとても安全で、アミューズメントも充実していて、家族で旅行するのにはピッタリだと聞いて、旅行先に選んだんだ。店で、いすや机に荷物を置いたまま注文カウンターに行く人がたくさんいるね。アメリカだと考えられない。どうして盗まれないんだろう？そんなところからも、大阪がとても安全だということが伝わってくるよ。

①カナダ ②21 歳 ③観光 ④コンビニに驚いている ⑤カナダにもコンビニはあるけど、日本のコンビニのクオリティーと店員の丁寧さはヤバいね！特にプリンやケーキなどのスウィーツは、まるで専門店のように種類が豊富で、ただただビックリだ。しかも味のクオリティーも信じられないくらい高い。陳列されている筆記具の種類もとてもたくさんあって、ボールペンごときになぜこんなにも種類が？と、戸惑うことすらあるよ。おまけに靴下やカミソリも売られている。コンビニというよりも、ちょっとしたスーパーマーケットだ。でも、スーパーマーケットと違って、そこらじゅうにある。「石を投げれば犬に当たる」状態だね。

最終ページに登場する堂山の老舗居酒屋「樽正」は、「関西の名酒場100」にも選ばれた名店中の名店。関西では数少ない、ノーベル賞授賞式晩餐会で振る舞われた「福寿」の直売所でもあるのです。

ガラス業発祥の地・天満には象印の本社が置かれ、「まほうびん記念館」があります。魔法瓶の原型ともなった、間が真空になっている二重壁のフラスコから魔法瓶の歴史まで、不思議があふれた記念館です。今春リニューアルして、さらに楽しくなっています。

キタのえええもん

キタの手みやげ

思い出すのは、昔懐かしお母さんの味

ここ数年、素材そのものの味を生かした無添加の〝自然派ドーナツ〟がじわじわブームですね。かつてのドーナツのようなガッツリした甘さではなく、素朴な味わいに、トレンドはシフトしてきているようです。

天神橋筋商店街には、そんな、自然派ドーナツを代表するお店「はらドーナッツ」があります。神戸発の「はらドーナッツ」は、関西よりも関東エリアにたくさんの店舗を展開しているのですが、大阪には3店舗しかなく、しかもそのうちの2店舗が天神橋にあるのです。この、関西における店舗の希少性は、手みやげにして喜ばれる資格じゅうぶんではないですか。

2008年（平成20年）に神戸で誕生した「はらドーナッツ」は、神戸の老舗である、はら豆腐店の豆乳とおからに、国産小麦がベースになってつくられているのだとか。スタッフのみなさんが、毎日、店舗で手づくりされています。

ひとくち食べると、ドーナツ生地はしっとりもっちりとしていて、素材本来の味がします。目指したのは「子どもの頃にお母さんが手づくりしてくれたような懐かしい味」。それも納得の素朴な味で、毎日でも食べたくなるような味です。そう、お豆腐を毎日食べても食べ飽きないように、「はらドーナッツ」のドーナツは、クリスピークリームのような口溶けの良さはないけれども、ほっこりとした優しい味わいがあるのです。お値段も1個130～200円程度で、お財布にも優しいです。

「はらドーナッツ 天三店」
【所在地】北区天神橋 3-11-11 西村ビル 1F・2F
【tel】06-6358-7744
【営業時間】7：30～20：00（ドーナツがなくなり次第終了）
【定休日】無休
【HP】haradonuts.jp

丹波の黒豆を使った「丹波黒豆きなこ」、シナモンをたっぷり巻き込んだ「有機栽培シナモン」、はちみつレモンの爽やかな甘酸っぱさがうれしいレモングレースたっぷりの「はちみつレモン」など、定番のドーナツは、ほんと、食べ飽きようのない、尖ったところがまったくない、優しい味わいです。

また、冷めてしまったドーナツはトースターで温めると、美味しくいただけるのだとか。逆に、チョコレートや季節のフルーツなどのアイシングがされているドーナツは、冷やして食べるとGOODなのだそうです。ドーナツの種類によって、美味しい食べかたが違うのですね。これ、お店の方からのワンポイント・アドバイス。

テイクアウトだけでなく、店内にはイートインのコーナーがあって、白を基調とした優しい雰囲気の店内でゆっくりとドーナツやドリンクをいただくことができます。

店内の広告や看板、それに袋やステッカーがレトロモダンなかわいいデザインで統一されていて、じわじわとやられてしまいます。

お店は、天神橋筋商店街の3丁目、夫婦橋のすぐ東にあります。あるいは、商店街の南側、アーケードを抜け切った天神橋の北詰にあります。どちらも、かわいい看板とウォールペイントが目印です。なぜ、天神橋に2店舗あるのか？　グループを束ねる企業の本社が、ここ天満・天神橋にあるからなのだそうです。（ルイス）

インディーズ系社会学者の考現學 北区マップ

天神橋筋・中崎町界隈古書店マップ

2010年（平成22年）、今からもう8年前になりますが、「天神橋筋・中崎町界隈古書店マップ」なるものが発行され、新聞各紙で取り上げられるなど、ちょっとした話題になりました。つくったのは……私です（笑）当時、関西大学社会的信頼システム創生センターが天三商店街に設置した地域連携拠点「関大リサーチアトリエ」に、院生スタッフとして常駐することになった私は、ここでなんらかのマップをつくろうともくろんでいました。そのリサーチのため界隈をウロウロしていたところ、あちこちに古本屋が点在していることに気づきます。そのひとつ「天牛書店」の女性スタッフに聞いてみると、「最近、お客さんから周辺の古本屋について聞かれることが多いんですが、私も把握しきれていなくて、案内ができないんです。そうそう！マップがあれば！」。こうして、〝マップをつくりたかった人〟と〝マップを必要としていた人〟の幸福な出会いにより、マップの作成がトントン拍子で決まったのでした。

本来、古書店は互いに競合するのではなく、取り扱うジャンルをすみ分けするなどして近隣に集積し、客の回遊を促すことで、共存共栄をはかることが望ましい業種です。そのため大阪古書組合も、天神橋筋界隈における古書店の集積に注目し、マップの必要性を感じていたのだとか。しかし、若者がカフェやイベントスペースを併設した古書店を開業するなど、組合に加盟しない新しい業態の店も増えてきていたことから、加盟店／非加盟店の垣根を越えたマップをつくることは容易ではありませんでした。そこでマップ作成にあたっては、ネットだけでなく現地調査や口コミによってすべての古本屋の情報を網羅することを試みましたが、非加盟店と同列に扱われることを嫌い、掲載を断られた店も。そんななか、「若い人ががんばってくれてるんやから、応援してあげな」と、一度掲載を断られた店に掛け合ってくださったのが、業界最古参「青空書房」の名物店主だった故・坂本健一さんでした。

そんな温かい後押しもあり、合わせて30店舗を掲載したマップが完成。エリアは天神橋筋に加え、徒歩圏内の中崎町、西天満、阪急東通りまでをカバーしました。それは、客の回遊性を高めるとともに、店同士の広域的なネットワークづくりのきっかけになれば、という思いからでした。配布を開始すると、マップを手に界隈を散策する人の姿が目立つようになり、初版4000部はあっという間に配布終了。掲載店からは、「他の店について知ることができて仕入れに役立ちます」「マップを通してお客さんと他の店について会話ができるようになりました」といった反響がありました。さらに、自らマップを持って古本屋巡りをしたという店主さんがいたり、加盟店／非加盟店の合同即売会が開催されたりもしました。それはコミュニティと呼べるほどの強いつながりではなかったかもしれませんが、互いの店を紹介し合える程度の弱いつながりが生まれたことにこそ意味があったと考えています。あれから8年、残念ながら店の数は減ってしまったようですが、そんな弱いつながりが、今もどこかで生きていればいいですね。（松岡慧祐）

スマホアプリ「マチイロ」をダウンロードすると、北区広報誌のみならず、大阪市24区の広報誌や全国の自治体の記事を読むことができます。ひとつのアプリでいろいろ読めるので、便利です。アプリは無料でダウンロードでき、アプリ内課金もありません。

北区銅像巡礼

堂島米市場跡碑

中之島ガーデンブリッジの北東角、ANAクラウンプラザホテル大阪と新ダイビルの向かいに、阪神高速の陰にひっそりと建つ銅像があります。稲穂を持って戯れる、幼い子どもふたりの像です。その台座には「濱」とだけ書かれています。そして、その手前には、「堂島米市場跡記念碑」があります。

碑には、

享保十五年（一七三〇年）幕府は堂島米市場に米の先物取引である張合米取引を公認したその取引の手法は現在の大阪証券取引所を始めとする世界各地における組織化された商品・証券・金融先物取引の先駆をなすものであり先物取引発祥の地とされている

背後の像は昭和二十八年彫刻家横江嘉純氏により製作され昭和三十年堂島米市場跡建碑会により寄贈されたものである

と記されています。この碑は社団法人日本証券業協会大阪地区協会名で建てられていて、どうやら後ろの像とは別に建てられたものようです。この碑があるおかげで、ここが堂島米市場跡であること、銅像がその記念碑として建てられたことが分かります。

この銅像が伝えようとしている「堂島米市場」とはどういう場所だったのでしょうか。碑文には「先物取引発祥の地」と記されています。先物取引とは、今では日経平均やTOPIXといった指数や株式などの有価証券、大豆などの商品の将来の価格上昇または下落を見越して売買し、決められた期日までにその反対取引をして差金決済をするのが主流です。

帳合米取引は、「立物米」という指定された銘柄のコメを帳簿上でやりとりし、実際のコメの受け渡しがおこなわれたわけではありませんでした。それで「帳合米」取引と言われていました。大阪で米市がはじまったのは、遅くとも1654年（承応3年）、帳合米取引がはじまったのは17世紀末と言われています。江戸幕府に公認されるよりずいぶん前から取引されていたようですが、先物取引と聞くと、現在の私たちが投機的な取引だと思うように、帳合米取引も、江戸時代の人々に「不実」な取引だと思われていたようです。それでも幕府が公認したのは、米価の低迷という、危機的な状態を打開したかったからでした。取引には、数百人が寄り集まって、独特の手ぶりをして、専門用語が飛び交い、そのすさまじい様子は「奇観」だという記録も残っています。知れば知るほど、この銅像のように子どもが戯れるような場所だったとは思えないのです。むしろ子どもには危険な場所だったのではないでしょうか。

じつは、銅像の台座裏にも碑文はあります。しかし、見ることができません。この銅像は、周りを草木に覆われていて、夏場ともなると、銅像さえも草の陰に隠れてしまうほどなのです。私も何度か挑戦しましたが、草木に阻まれてどうしても碑文を読むことができませんでした。この像の姿の謎は、もしかしてこの隠された台座裏にあるのではないかと思えて仕方ありません。（棚橋真理）

駅探 えきたん

JR大阪 JR Osaka

JR大阪駅のとても風変わりな時計

巨大ターミナル・JR大阪駅で誰かと待ち合わせの約束をするとしたら、あなたならどこで待ち合わせをしますか？

私なら、最初に思い浮かぶのは、「時空（とき）の広場」の金時計です。JR大阪駅のホーム上空を南北に横断する連絡橋は上下2段構造になっていて、上部の「時空の広場」の北の端には金時計があります。下部の連絡通路に比べると歩く人が少ないうえに、場所も説明しやすいので、初めてJR大阪駅で会う人と待ち合わせるときにお世話になります。

5代目となる現在の駅舎が誕生したのは、2011年（平成23年）。印象的な大屋根と駅の南北に巨大な商業施設を備えた巨大ターミナルの誕生に際しては、8つの広場が設けられ、広場のイメージに合わせた時計がひとつずつ設置されました（「時空の広場」のみ、金時計と銀時計の2個が対になって設置されました）。なかでも、「南ゲート広場」の水の時計は、CNNトラベルにて「世界でもっとも美しい12の時計」に選ばれ、つとに有名です。あなたは、いくつの時計を知っていますか？

JR大阪駅桜橋口を出て東側のエキマルシェ大阪付近には、とても風変わりな時計があります。何度もこの時計の前を通ったことがあるにもかかわらず、私は、その時計にまったく気がついていませんでした。だって、この時計には、普通の時計に見られるような、短針と長針や、数字の表記などが、まったくないんですよ。茶色や灰色の地味な柱に、赤や青や緑などに点灯する縦長の光のバーが規則正しく埋め込まれているだけで、これが時計だとはとても思えません。消灯している光のバーが点灯し、その数を数えて現在の時刻を読む時計なのだそうです。円柱の円周を4等分し、4つの時計が合体して、ひとつの構造物になっています。柱の真んなかより上部が時（短針）を表し、真んなかから下部が分（長針）を表します。上部の光のバーがひとつ点灯すれば1時、ふたつ点灯すれば2時です。下部はもっと分かりにくく、1つ目が点灯すると0分～5分の間、2つ目が点灯すると6分～10分の間を表し、5分刻みで光のバーがひとつずつ点灯します。ぱっと見てすぐに時刻が分からないうえに、5分間隔でしか分からないので、正確な時刻が分かりません。ついでに、私も何を書いているのか分からなくなってきました（笑）

ただ、この時計、正時（しょうじ）になると、すべての光のバーが連動して点灯し、正時になったことを知らせてくれます。鐘の音などで正時を知らせる時計はいくらでもありますが、光の演出だけで正時を知らせる時計って、他には知りません。

分かりにくい場所にありますが、JR大阪駅で待ち合わせをすることがあれば、ぜひ、この時計の前で。どんなふうに点灯するのかを楽しみにしながら、待ち合わせをしてみてください。（平井裕三）

彼女とキタのラブストーリー
――第十三回――

北区地域女性団体協議会 会長
「珈琲の店 ボア」店主
室谷聖子さん

「中之島で会議をするときは、喫茶店でするんだよ。集会所はないけど、いいお店あってね、何かあるとみんなそこに集まるんだよ」という話を聞いたとき、中之島には大きなビルがたくさんあって会議室もたくさんありそうなのに、集会所がないの？　など、次々に疑問が湧いてきました。それと同時に、喫茶店でテーブルを挟んで会議をするって、和気あいあいとしていいなと思いました。

その、地域の集会所にもなっている喫茶店「珈琲の店 ボア」は、国立国際美術館と大阪市立科学館の近くにある、薄緑の壁に、わさび色の窓枠が目を引く瀟洒なお店です。お店をされている室谷聖子さんにお話をうかがいました。

お母さんがはじめた「珈琲の店 ボア」

室谷さんの家業はもともと酒屋だったそうで、「戦争で男手が取られてしまって、続けていけなくなって、酒屋の権利を親戚に渡してしまいました。だから、戦争が終わって、このお店をはじめたのは母なんですよ」。戦後間もなくの頃は、男性がほとんどいない状態で、女性が家族を養っている家がたくさんあったそうです。当時の女性は、今の自分たちよりももっともっとたくましかったと話されます。お店をはじめたお母さんも、そんなたくましい女性のひとりでした。「結婚するときに、喫茶店と言われても、よく分かっていませんでした。商談喫茶って言うんですけど、緑茶でもお出しするのかしら、くらいに思っていたんです」。喫茶店がどういうお店で、どんな人が来るところなのか、想像もつかなかったと話されます。

子育てがいち段落した頃からお店を手伝うようになり、見よう見まねで習いました。「お店は大人のための場所だったので、子どもはいてはいけないと思っていました。隣の部屋から子どもの足音や声が聞こえるのもよくないだろうと思っていて、それで離れていたんです。でもいつまでも見ているだけというわけにはいきませんわね。お店に立ちはじめた頃は、お勘定でお金を持つ手が震えました」。

聖子さんがお店に入るようになった頃、中之島にある企業の人々は、休憩だけでなく、商談や打ち合わせ、会議でもお店を利用していました。「ものすごく活気がありました。今では、お店で仕事の話をしていても、サボっていると思われるみたいですね。仕事の話をする人は減りました。ちょっと休憩に来られる、静かなお客さまが増えましたね」。中之島で働く人の様子もずいぶん変わってきたと話されます。

高層ビルとホテルが立ち並ぶ中之島ですが、大阪大学の医学部、歯学部、理学部があった頃は、学生のまちでもありました。学生運動のときには、学校が封鎖されているため、先生が学生を連れて来店し、授業をしていたこともあったのだとか。企業から大学の先生に会いに来るのも、お店でした。大阪大学を中心にいろんな人が集まり、ボアは、中之島で活動する人々が意見を交わす場所になっていました。「大阪大学に縁のある100歳くらいのおじいさんが、今はどうなってるかなと見に来られることもあります。それに、昔は偉かったんだろうなって思うような人が懐かしんで来られたり、今偉いんだろうなっていう雰囲気の人が、先生に聞いて来ましたっておっしゃったりしてね、おもしろいですよ」。今でも中之島に帰りたいとおっしゃる学校関係者の方もおられるのだとか。「珈琲の店 ボア」は、多くの人に語り継がれるほど愛されたお店であり、大阪大学に関係する人たちにとっては、当時の面影を残す数少ない場所になっています。

また、「中之島には、地域集会所がないんですよ。堂島・中之島老人憩の家が堂島にありますけど、しょっちゅう堂島まで行くのもね。やっぱり中之島で集まりたいですよ。それでお店で集まっているんですね」。

室谷さんの家は、ひいおじいさんの代から町会の役員をされていたそうで、お店は、自然とまちの人が集まる場所にもなりました。「町会の会議だけじゃなくて、夏になると、盆踊りの練習もお店でやっています」。週末の夜の、営業時間外のことだそうです。100席はありそうな広い店内にそんな使い方があったとは！　もう、中之島になくてはならないお店なのです。

災害のまち、中之島

1939年（昭和14年）、大阪生まれ。結婚を機に聖子さんが中之島に来たのは、ちょうど第二室戸台風が過ぎた後の、1963年（昭和38年）のことでした。

「びっくりしますよ。家の壁の一階の半分くらいの高さのところに、くっきり水の跡がついているんです。怖いですよ。今も怖いです。大丈夫だなんて思ったことはありません」。火事より水害が怖いという聖子さん。「怖いですし、ここを離れようという人がいても仕方ないと思います。そうは思うけれども、私自身は自分の代でここを離れることはできません」。怖さも大変さも含めて、中之島。その覚悟が伝わってきます。

過疎だったまち、中之島

中之島は北区のなかでも、もともと住んでいる人がとても少ない地域です。中之島小学校が廃校になってからも、ずいぶんと時間が経ちます。「PTAの役員もしていたので、廃校になるときは、もちろん反対しました。中之島には空き地も多いし、いずれマンションが建って人も増えるだろうから、残してほしいってずいぶん言ったんですけど。当時は聞く耳持たずでね、結局、学校はなくなりました。廃校になった後も、統廃合で学校はどんどん遠くなりましたね。子どもたちがかわいそうでした。同級生の家が遠いので、気軽に行き来して遊ぶこともできませんでした。だから、中之島の子どもたちは、福島区や西区の学校に行く子どもが多いんです。そうするとね、福島区や西区の子どもになってしまうんですよ」。子どもは、学校行事が優先になるために、地域の行事に参加できないことがあります。同時に、その親御さんも地域の活動をはじめるきっかけを失ってしまいます。住んでいる地域のことを知らないと愛着を持つことも難しくなります。聖子さんは、何度も「小さい子どもを大切にしないといけないんです」と話されます。

マンションが建つようになって、転機となったのは、ラジオ体操です。もともと夏休みに1週間程度しかやっていませんでしたが、「手伝うのでもっと長くやりませんか」と声が上がり、それならと夏休み中ラジオ体操をすることになりました。子どもを中心に人が集まって話をしたりする機会にもなり、新しく建ったマンションに住む人たちが地域の活動に参加するようになりました。「ラジオ体操も餅つきも、最初は一緒にやるんですけど、そのうち若い人たちにお任せするようになりました。若い人はなんでも上手にやりますね。今では地域の役をしている人もいます」。

「今の子どもたちは、老人を知りません。親も先生も若いから、見たことがないんでしょうね。じっと手を見るんです。皺が珍しいんですね。だからこう、引っ張ってみて教えてあげると、へぇっ！って驚くんですよ」とニコニコしながら話されます。「もっと歳をとると、自分の家も分からなくなってしまうから、顔を覚えておいてね。迷子になったら、家まで連れて帰ってねって言うと、はーいって言ってくれるんですよ」。そんなふうに話されたら、子どもは喜んで連れて帰ってくれるに違いありません。聖子さんのおっとりした雰囲気で、話がおもしろいとなれば、もう子どもの心はつかんだも同然です。

聞き手・書き手・撮影／棚橋真理

受け継ぎたいまち、中之島

大家族でおおらかに育ったという聖子さん。子育てもおおらかにされていたそう。「子どもって周りをよく見ています。同じことをしても、叱られるときと叱られないときがあるのはなぜ？って聞かれたときに、ハッとしました」。子どもに言い聞かせようとしていることを、自分自身ができているのかと振り返るのだそうです。「言うほど自分もできません。できないことを言ってもね」。その思いは、何事にも通じています。

聖子さんは、この4月から北区地域女性団体協議会の会長に就任しました。「会長になると、さらに大変だなと思います。何が大変って、忘れないようにきっちりしておくことが大変です。何かあったときは、私が言い忘れたんかな、間違えたんかなって思うんですけど、いろんなことが多すぎて、考える時間がありませんね。だから、人のことなんて言ってられません。自分ができているか、どれだけできるか、いつも精いっぱいです」。聖子さんはとにかく振り返ってみて、反省する人なのです。

「小難しいことを言わなくっても、まったり過ごしていたら、人生なんてあっという間ですよ。兄弟で集まると、いつもそんな話をしています」と、ゆったりしているのが好きだという聖子さんですが、いざというときは機転を利かせて大胆に行動します。

「学生の頃に、材木を取り扱っていた実家の倉庫が火事になりかけたことがありました。結局大丈夫だったんですけど、そのとき私、道の真んなかに立って、交通整理をしてたんです。迂回路を案内してね、消防車に早く来てほしくって、他の車を逃してたんですよ。ここぞというときには、機転が利くんです」。その機転は、その後、お店に自動車が突っ込んできたときにも発揮されました。「あのときは、びっくりして走って見に行きました。幸いお客さまがいないときでよかったんですけど、突っ込んできた人に、保険に入っているか聞いたり、勤め先を聞いたり。逃げられたらあかん！と思ったら、いろんなことがパパパーっと思い浮かぶんです」。

戦争で何度も防空壕に入り、いざというときを幾度となく乗り越えてきたからこそ培われた機転だと話されます。

「当時私は子どもでしたけど、私の上の世代の人たちはもっともっとたくましくて、人間の力がありました。戦争で大変な思いをしましたけど、優しい人たちがたくさんいました。周りの大人にも優しくしてもらいました。だから私も、人のために何かしないといけないという思いがあります」。その思いから地域の活動に積極的にかかわっているのだそう。

亡くなったご主人も、町会長をされていました。

「何も言わない人でしたけど、全体をよく見ている人でした。古武士のようだと言われたこともありますね。真っすぐモノを見て決める人でした。だから、もし注意されるようなことがあったら、それは自分が悪いってことなんです。そんなことになったらあかんと思っていました」。若い頃は不良に話をつけに行ったり、失敗して困っている人がいたら一緒に謝りに行ったりするような方だったそうです。そんなご主人とい て、自分を律しないわけにはいきません。

聖子さんは、ご主人の陰となって支えるように活動するのではなく、自ら地域とかかわり、活動をされてきました。「自分は自分です」とも。

朝7時からお店を開け、日中は北区のあちこちに出向くため何度も出たり入ったりを繰り返している聖子さん。「毎日、あっという間です。追いかけられているみたい」。

今、中之島にはタワーマンションがどんどん建って、人が増えてきました。

「ファミリー向けのマンションが増えたのは大きいですね。いろんな行事で集まる人が増えて、話ができるようになってよかったと思います」。人気のない過疎の時代を経験しているからこそ、まちにいろんな人がいて、話ができたり、一緒に活動していることを喜んでいると話されます。「もう、新しく来た人とは言えないくらい一緒に地域の活動をしている人もいます。とても頼もしいです。これからも、まちを引き継いで、まちをつくっていってもらいたいですね」。

（終）